

『宝治百首』における類似歌と賀の歌について

岡本 要子

はじめに

『宝治百首』は、『続後撰和歌集』の編纂に先立って催された応制百首である。この百首に関して二条良基の『近來風躰』には「宝治の民部卿入道の御百首、歌の本にて侍べき由申き」と見え、二条派において『宝治百首』が重視されていたことが知られる。また、『宝治百首』諸本および成立・内容について研究された安井久善氏も、『続後撰和歌集』以降の勅撰集に『宝治百首』から入集した和歌が四百三十余首あること等から、『宝治百首』が中期和歌において非常に重要な作品であることを指摘した。² こうしたことから、『宝治百首』は新古今後の歌壇の様相を知る一つの手がかりになる作品であり、その詠進の在り方や特徴を改めて考えるべき重要な作品であると言える。

本稿では、『宝治百首』に見られる類似歌の存在からその詠進の様相を想定し、類似表現から『宝治百首』の一特色を

考察していく。

なお『宝治百首』の成立に関しては、藤原為家の次男である源承（藤原為定）が『源承和歌口伝』に次のような記述を残している。

卷十 訓説おもひくゝなる事

勅撰よりさきに、よろしき歌たてまつりぬべき人々をさだめて百首をめさる、宝治には廿五人とさだめられき、其後なほくは、る人も侍りしやらん、されども秀歌よめる人はすくなくて、先人後に十六人之百首をかきつゞけたりき。³

ここから、『宝治百首』企画に際して「よろしき歌たてまつりぬべき」「廿五人」ほどが選ばれたものの、「秀歌よめる人」が少なかつたため、追加で「十六人」が歌人として加わったことがわかる。そこで、各例歌の作者のうち、初めから『宝治百首』作者となっていた人物には「初」、追加作者には「追」をつけた。和歌の検索・引用は日本文学 web 図書館「和歌&俳諧ライブラリー」による。

一 「類似歌」の存在

『宝治百首』には、似た表現を持つ歌を複数見ることができ、それを本稿では便宜的に「類似歌」とする。ここでは、それらの類似歌の指摘と、その類似した表現が詠み込まれる背景として、類似表現の先行例が存在するかの確認を行って置く。

【例一】「春よりさきに春」が来る（『宝治百首』春廿首「歳内立春」）

2 あらたまのとしとやいはむ立帰る春よりさきに春は来にけり（「初」道助）

3 君が代のちとせにあまるしるとや春よりさきに春のきぬらん（「初」実氏）

ここに見られる「春よりさきに春」が来るという表現について、それに近い表現を調査すると、まず『貫之集』の歌を見出すことができる。

人の家に、女すだれのもとに立出でて雪の木にふりかかれるを見る

372 草木にも花咲きにけりふる雪や春より先に花と成るらん「春よりさきに春」に似た表現が、破線部に見られる。しかし、破線部は〈春より先に花が咲く〉という表現であるため、【例一】の傍線部とは一致しない。また、『拾遺和歌集』卷十六雑春にも、

ももぞのの斎院の屏風に

よみ人しらず

1007 梅の花春よりさきにさきしがど見る人まれに雪のふりつ

【貫之集】同様、梅の花が〈春より先に咲く〉というものであるため、これもまた一致しない。似た表現として、「年よりさきに春もたつ」という表現にまで調査範囲を広げれば、『宝治百首』春廿首「歳内立春」に次の歌を見出すことができる。

36 わが君の千代のはじめのけふとてや年よりさきに春もたつらん（「初」俊成卿女）

この「年よりさきに春」が立つという表現についても、『貫之集』に次のように似た例を見出すことができる。

858 あら玉の年よりさきに吹く風は春ともいはず氷ときけり破線部は、〈年よりさきに風が吹く〉というものである。俊成卿女の「わが君の千代のはじめのけふとてや年よりさきに春もたつらん」に似てはいるものの、意味も表現もやはり異なっている。また、時代を下れば、香川景樹（一七六八—一八四三）の歌集である『桂園一枝拾遺』上・春に

初春鶯

5 あけぬからなく鶯はあら玉のとしよりさきにたちがへりけむ

破線部「としよりさきにたちがへりけむ」という表現は見る事ができるものの、俊成卿女が詠み込んだ「年よりさきに

春」がたつという表現も他に見ることができない。

【例二】「年を残して：」（『宝治百首』春廿首「歳内立春」）

27いつのまにそらのけしきも荒玉のとしをのこして春はき

ぬらん（「初」経朝）

35立ちそむる春のけしきのしるれば年を残して冬や行く

らん（「初」小宰相）

27番歌傍線部「年をのこして春はきぬらん」と、35番歌「年を残して冬や行くらん」は、春が来ると冬が行くことでベクトルは異なるが、両首の表現は非常に近いものである。この両首の傍線部「年をのこして：」に似た表現は、他の例を見つけることはできない。35番歌「立ちそむる：」が、『題林愚抄』卷一春部一の53番に見られるのみである。

【例三】「道のべに染めてみだるる」（『宝治百首』春廿首「行

路柳」）

284道の辺に染めてみだるる青柳のかみなび山をけふやこえ

なん（「初」基家）

286打ちなびき春さりくれば道のべに染めてみだるる青柳の

糸（「初」基良）

298道の辺にみだれてなびく青柳の木立もみえぬかげをふむ

かな（「追」定嗣）

「道の辺に染めてみだるる」は284・286番歌に全く同じ表現を見ることができ、さらに298番歌には「道の辺にみだれてなびく青柳」のように傍線部と似た表現がある。傍線・破線双方について、他の用例を探してみても、見つけることはでき

ない。

【例四】「下もえ：野辺の若草」（『宝治百首』春廿首「若草」）

367みわたせばむら消えわたる雪間より下もえにける野べの

若草（「初」隆親）

374ふみ分けて荻のやけ原いつしかと下もえわたる野べのわ

か草（「追」資季）

傍線部「下もえにける（わたる）野べの若草」について用例を探してみると、『宝治百首』成立以前に『新撰和歌六帖』六帖「はるのくさ」

190もえ出でし野べのわが草けさみればすすめがくれにはやなりにけり

破線部に近い表現もあるが、【例四】の傍線部に一致はしない。最も近いのは、『続拾遺和歌集』卷一春上

題しらず

よみ人しらず

23いまよりは春になりぬとかげろふの下もえいそく野べのわかくさ

右の波線部である。この歌の成立年は判然としないが、あるいはこうした詠を下地に、『宝治百首』の歌が作られた可能性もある。また、『新続古今和歌集』卷十一恋二には

春恋といふことを

蓮生法師

103しるらめや野べのわか草下もえて消えあへぬ雪のひまを待つとは

傍線部に見られる「野べのわか草下もえて」という表現もあるが、作者の蓮生法師は『宝治百首』作者の一人であり、『宝

治百首』歌を意識していた可能性もある。また、より後年に至ると、猪苗代兼載（一四五二―一五一〇）の『閑塵集』春歌に

若草

27冬に見づ下もえ初めてくる春の色にぞなびく野辺の若草、
右の歌を見ることができると、『宝治百首』と一致するとは言い難い。

【例五】「足引きの山田のさなへ：民：」（『宝治百首』夏十首

「早苗」

921足曳の山田のさなへとりどりに民のしわざはにぎはひに

けり（「初」御製）

922あし引の山だのさなへ数数に年ある民のほどぞしらるる
（「初」道助）

この例は、傍線部の一致だけにとどまらず、「とりどりに」と「数数に」が語調としても一致している。傍線部が『宝治百首』で生まれる先例を他に探しても、後藤基政（一二二四―一二六七）撰『東撰和歌六帖』夏に、

134程遠き山田のさなへ取る民の足もやすめぬ里の通路（顕

氏）

という歌があるのみであり、『宝治百首』の歌に一致するとは言えない。この【例五】に関しては、922番歌を詠じた道助の主催した『道助法親王家五十首』「早苗多」題において

294ますらをが千町のさなへとりどりにけふはさ月とうえい

そくなり

308里わかぬ四方のさなへのかずかずに君のめぐみの色やみ
ゆらむ

破線部のように「とりどりに」と「かずかずに」を用いた歌を見いだすことができる。道助はこうした歌を念頭に、『宝治百首』922番歌を詠んだことが考えられよう。

【例六】「鳥のねは：関のとに：朝霧」（『宝治百首』秋廿首「関霧」）

1767鳥のねはいそぐ習の関のとにあくるをみせぬ秋の朝霧
（「初」為家）

1768鳥のねはあけぬとつくる関のとに猶道たどるやまの朝霧
（「初」公相）

この歌に関しても、傍線部の表現が一首中に見られるものは他に見つけることはできない。

【例七】「：月：ほのか（はつか）：：いかでしらせん」（『宝治百首』恋廿首「寄月恋」）

249あしがきにもりくる月のほのかにも隙なき恋をいかでし
らせん（「追」寂能）

240山の端にふけて出でたる月影のはつがにだにもいかでし
らせん（「追」為氏）

この歌は、破線部に「ほのか」、「はつか」と違いが見られるが、いずれも「わずか」の意で解せる。他の歌集で同様の歌を探すと、三条西実隆（一四五五―一五三七）『雪玉集』「着到百首和歌」に

寄月恋

7138 おもふ事まだいでやらぬ月影のほのかにだにもいかでし
らせん

という歌が見いだせ、『宝治百首』240番歌に近いが、『宝治百首』成立後の作である。

【例八】「おもひ」「こがれ（こがるる）」「煙」「した」（宝治百首）
恋廿首「寄煙恋」

2563 我ばかりおもひこがれぬかはら屋の煙もなほぞしたむ
せぶなる（「初」基良）

2574 かはらやの下にこがるる夕けぶりたえぬおもひのあり
とだにみや（「追」師継）

語順は異なるが、この二首もやはり表現が近似している。同様の語句を用いた歌としては、『延文百首』に

寄煙恋

為重

1673 下にただおもひこがれてかはら屋のうへにはみえぬけぶり
ともがな

という一首が見出せるが、『延文百首』は『新千載和歌集』編纂のために企画された百首歌で、一三五七年に大部分詠進されていたと考えられるため、この一首はむしろ『宝治百首』の影響を受けて作られたと考ええるべきであろう。

【例九】「いはいはでの関しる人」（『宝治百首』恋廿「寄煙恋」）

2606 みちのくのいはでの関のいはでのみ過ぐる月日をしる人
ぞなき（「初」公相）

2618 おもへどもいはでのせきに年へぬる我がこふらくはしる

人もなし（「追」顕氏）

この歌に関して、「いはいはでの関」と「しる人・なし」を一首中に詠む歌は他に見出すことはできない。

この他にも『宝治百首』には類似歌が複数確認できる。また、ここまでに見てきたように初めから作者に選ばれていた歌人と追加歌人双方に類似歌が見られる。そして、その近似する表現が生み出される先例は管見の限りでは見いだせていない。偶然に二人の歌人が類似歌を詠む理由としては、その類似表現の先例が既に存在することが自然であるが、そうしたものが不在中で、これらの類似歌が詠まれているようなのである。

こうした百首歌における類似歌・類似表現の存在については、他の応制百首においても先行の指摘がある。例えば『堀河百首』に関しては、鳥井千佳子氏が『堀河百首』にそれまであまり先例のない難儀語が多く用いられていることから、『堀河百首』成立の背景には、その百首歌を詠むことを目的とした共通の「場」が存在し、それに参加した歌人たちが共同でこれらの百首歌を詠んでいるのではないかと考えられているのである⁴と考えている。竹下豊氏も『堀河百首』に二十首を超える類似歌が存在することを指摘された上で、「堀河百首」詠進のための『百首作歌研究会』のようなものが持たれ、顔を合せて詠歌し、批評し合ったりすることもあったであろう⁵と推測した。そうした「百首作歌研究会」についてはその他の百首歌についても考えられている。『永久百首』

においては、偶然とは思えない類想表現が見られることから『永久百首』の和歌が詠作から提出編纂に至るまで、完全に個別に詠まれたとは考えがたいと言えるだろう。むしろ七人の百首の間には何かしらお互いの詠作に影響を及ぼすようなことがあったと仮定したほうが自然だと思われる」と伊倉史人氏は述べている。『為忠両度百首』については、井上宗雄氏が「為忠百首を詠んでいると、若干の歌人間に下相談？があったとしか考えられない歌がある」とし、佐藤明浩氏は『為忠両度百首』内の表現の一致をもとに「詠作の場の共有」を「院政期における作歌の現場の問題」として捉える必要性を述べた。同様に、『久安百首』に関しては黒田彰子氏が「特定のグループ内での、表現の琢磨の過程から類似歌が生まれる」ことを述べている。

こうした先行の指摘の存在を考えると、『宝治百首』詠進においても、作者間で情報交換がされていたのではないかと推定できるのではないだろうか。そして、『宝治百首』詠進に際して行われた歌人間の情報交換が、既に先例のあるものであったのではないかと考えられる。

二 「春雨」題における賀の歌の存在

『宝治百首』には、同題歌四十首の中に類似表現が複数見られるという藤平泉氏による指摘がある。藤平氏は「春雪」題の中に「春の泡雪」が十二首見られるといった多出表現に

ついて「ある種の流行表現」であったとした。しかし、本稿第一節で確認したように、『宝治百首』では、その詠進に際して情報交換が行われたことが考えられるため、単に「流行表現」と捉えるよりは、作者間での申し合わせがあった上での表現の類似と考えた方がよいのではないか。そう考えたとき、注目されるのは春廿「春雨」題である。「春雨」題は、『堀河百首』でも設定されたことのある題である。その「春雨」題には次のような歌が詠まれている。

325 いたづらにふりぬと思ひし春雨の **めぐみ** あまねき御代にあひつつ（家良）

326 春雨のあまねき御代の **めぐみ** とはたのむものからぬる袖かな（基良）

327 里わかぬうるほひ四方にあふぐかな君が **めぐみ** の春雨の空（隆親）

328 をちこちもわかずや雨にうるふらんあまねき君が春の **めぐみ** は（為家）

330 みな人も君が **めぐみ** をたのむらんこのめは春の雨そそくなり（実雄）

331 春の雨の降りにし御代に帰りきて身の霜がれを哀とはみよ（信覚）

338 春雨の **めぐみ** あまねき君が代に跡を尋ねてふるかひぞある（定嗣）

339 もらすなよあまねき御代の春雨のふりぬる身にも哀かけつつ（成実）

350ぬれてだに御代のめぐみにもれじとてをがさもとらぬ
春雨の空（隆祐）

360のどかなる御代のしるしをみせがほに四方の草木もめぐむ

春雨（下野）

「春雨」題四十首のうち、四分の一にあたる十首が君の治世を寿ぐ賀の歌である。また「めぐみ」を詠み込む歌も九首見ることができる。一方、「堀河百首」の「春雨」題詠には君の治世を寿ぐ歌は一首も見ることができない。では、『宝治百首』に見られる「春雨」で君の治世を寿ぐという表現が多く詠まれる必然性はあるのか。より広く、「慈雨」の歌がいかにか詠まれてきたかを確認することで、「春雨」で君を寿ぐ歌が詠まれるようになった流れを考えてみたい。

「雨」・「めぐみ」を共に詠み込む早い例は、唯心房寂然（生没年未詳、寿永元年まで生存か。）の家集と考えられている『法門百首』の次の歌である。

薬草喻品 草木叢林随分受潤

4した草もめぐみにけらしこのめはる雨のうるひやおほ
あらきの杜

草木をば人天二乗菩薩にたとふ、是を五乗といふ、一切衆生みな仏の道にいるを、如来の世に出で給へるまさしき心とせり、しかはあれど平等一味のあめ、わくところなければ、菩薩の大樹にそそくうるほひ、おのづから人天の小草までその益をうるなり、おほあらきの杜のしづくにめぐみいづるした草にも思

ひよそへつべし

この「雨」は、その上の「このめはる」傍線部が「木の芽張る」と「春雨」とを掛けていると考えられるため、「春雨」の「めぐみ」を詠む比較的早い例と見ることができるといえる。次の『重家集』では、御代の「めぐみ」が「あめ」とともに詠まれているが、春の雨ではない。

刑部卿三位したりしにいひつかはしし

255ちとせまでさかえゆくべき君なればまつもくらゐをゆづるなりけり
返し

刑部

256あめよりもあまねきみよのめぐみにはおいぬる松もげにさかえけり

次に掲げるのは『別雷社歌合』である。

十番

左勝

19神山の梢にかかる夕霞これこそ春の手向なりけれ

経盛

右

資隆

20春霞あめの下にぞみちにける神のめぐみもかくぞ有りける

左歌、山のとほきを梢にかかる夕霞といへる文字つづき、いひしりてこそ見え侍れ、右歌、神のめぐみもなどいへる心はいうに侍るに、霞やあまりならんとぞ見え侍る、左を勝とす

ここでは「春」の「あめ」が詠まれているが、この「あめ」

は「天」の意と解される。また「神のめぐみ」とあるため君の「めぐみ」を詠んでいるとは考えられない。また次の『正治初度百首』も注目される。

前斎院式子内親王後白河院皇女、祝

300 あめのしためぐむ草木のめも はるにかぎりもしらぬ
御代の末末

小侍従、春

302 君が代のあまねき雨やこれならんめぐみわたらぬ草の
はもなし

300番歌式子内親王の「あめのしためぐむ草木のめもはるにかぎりもしらぬ御代の末末」は、「はる」に「張る」・「春」が掛けられており、「春」の意を認めることができる。また、「御代の末末」も君の治世の子孫繁栄を寿いでいる。また小侍従の「君が代のあまねき雨やこれならんめぐみわたらぬ草のはもなし」は、春題の歌であり、「君が代」・「雨」・「めぐみ」も詠み込んでいる。『宝治百首』に詠まれている「春雨」題での君の治世を寿ぐ歌は、こうした歌に倣ったものとも考えられよう。

このほか、慈雨を詠んだ例を調査すると次のような例を見出せる。次は藤原定家の『拾遺愚草』上の一首である。

1396 君がよのあめのうるひはひろけれど我ぞめぐみの身に
あまりぬる

春雨ではないが、君の治世を寿ぐ例と見ることができ。ま

た、『老若五十番歌合』においても、

二百十五番

左

寂蓮

429 おしなべて梢ふきしく山風にひとりしなのるまつの音か
な

右勝

左大臣(良経)

430 民もみなきみに心をつくば山しげきめぐみの雨うるふ
世に

430番歌に「きみ」の「めぐみ」を詠んでおり、君を寿ぐ歌と言えよう。

以上、「雨」と「めぐみ」を一首中に詠み込んだ慈雨の例をたどってみると、そうした歌は保元元年(一一五六)長寛二年(一一六四)成立と考えられる『法門百首』以降、継続的に詠まれている。内容としては、〈天の恵み〉の他に〈君の恵み〉を詠んでいるものも詠まれるようになっており、その表現の中で「春に降る雨」も詠み込まれている。しかし、『宝治百首』にみられるように一首の中で「春雨」をもつて、君を寿ぐ歌はスタンダードと言えるほど多くは詠まれていないようである。「春雨」を詠み込むことよって君の治世を寿ぐ賀の歌を多く収載していることは、和歌表現の変遷の上でも注目すべきことと言えよう。

では、『宝治百首』全体で君の治世を寿ぐ賀の歌がどのようにならているのか。後掲「表」によりそれを確認していくと、雑歌「寄社祝」題で二十九首、「寄日祝」題で三十三

首存在することは祝題を設定している以上当然であるが、次に君の治世を寿ぐ賀の歌が多いのが春「春雨」題の十首である。「春雨」題歌の中で君の治世を寿いでいることは、『宝治百首』のもつ特徴の一つであると言えよう。

三 後嵯峨院の治世を寿ぐこと

『宝治百首』の企画を下命した第八十八代後嵯峨院は、紅余曲折あつて天皇の位についた帝である。八十二代後鳥羽天皇・八十三代土御門天皇・八十四代順徳天皇による承久の乱後、仲恭天皇が廃帝となり守貞親王の皇子後堀河天皇・四条天皇が続いていた。しかし、その四条天皇が十二歳という若さで崩御したため、次なる帝として、承久の乱に積極的に加担しなかつた土御門天皇の第二皇子、邦仁親王が即位（後嵯峨）することになる。

この後嵯峨院の治世について諸書を確認すると、その治世を寿ぐ傾向にある作品を多く見ることができ。例えば『増鏡』では、

院の上は、いつしか所々¹¹に御幸しげう、御遊びなどめでたく、今めかしきさまに好ませ給¹¹。

などと、華々しい御幸が行われていた時代であつたことが語られる。また北畠親房の『神皇正統記』（康永二年修訂）では、次のように記す。（傍線は引用者による）

御身ヲツ、シミ給ケレバニヤ、天下ヲ治給事四年。太子

ヲサナクマシくシカドモ讓國アリ。尊號例ノゴトシ。院中ニテ世ヲシラセ給、御出家ノ後モカハラズ、二十六¹²年アリシカバ、白河・鳥羽ヨリコナタニハオダヤカニメダタキ御代ナルベシ¹²。

ここでいう「御身」とは、後嵯峨院自身のことであり、後深草天皇に讓位をしたことが記された場面である。その中に、後嵯峨院の治世を「白河・鳥羽ヨリコナタニハオダヤカニメダタキ御代」と表する記述が見られる。このことは、後嵯峨院が後の亀山・後宇多・後二条・後醍醐と続く皇統の祖であることと不可分ではあるまい。後醍醐天皇の子である幼帝後村上天皇のために、南朝の正統性を述べる目的で執筆された『神皇正統記』にとつて、後嵯峨院の治世は肯定されるべき代であつた。そのため後嵯峨帝の治世を寿ぐ記述は、ある程度差し引いて考えるべきであろう。しかし、こうした後嵯峨院の治世を寿ぐ姿勢は、他の書にも見ることができ。例えば『五代帝王物語』では次のような記述を見ることができ。（傍線は引用者による）

白河・鳥羽二代の御事は申にも及ばず。それも猶撰録の事に付て御心に違ふ事共ありけるうへ；保元の事出来て、御忌の中に死罪をのみ行れて浅猿かりけり。まして後白河・後鳥羽二代は目出き御事共も多、末代の佳例にこそ引まゐらせたれども、うき事をも御覽ぜられしに、故院（の）御代は波も風もた、ず、都の中殊に穩に、三十一年保せ御坐す事、ありがたき程の聖運にてぞわたらせ給

うへ、叡慮柔和にうけて、御慈悲をさきとせり。¹³⁾

『五代帝王物語』では後嵯峨院の治世を三十一年としてい
る点、『神皇正統記』の三十年(天皇として四年、院政を
二十六年とする)とは異なるが、その御代を「波も風もた、
ず、都の中殊に穩」(傍線部)やかな世であったとする。また、
成立は未詳ながら『保曆間記』においても、(傍線は引用者
による)

御身ヲツ、マセマシクテ、僅ニ四箇年アツテ退セ玉テ、
大上天皇ニテ政ヲセサセ玉ヒケリ。白河、鳥羽ヨリ以来、
ヲタヤカナル御代ニテソ渡セ玉ヒケル。

「ヲタヤカナル御代」と表されている。ここまでに見たよ
うに、後嵯峨院の治世は、後年賞賛される対象となつてい
る。後嵯峨院歌壇の状況はいかなるものであつたか。

後嵯峨院歌壇については、佐藤恒雄氏がその政教性の強さ
を明らかにしている。例えば、『宝治百首』の企画目的となつ
た『続後撰和歌集』については、次のように分析する。(傍
線は引用者による)

『続後撰和歌集』巻二十「賀歌」巻頭の

宝治二年、さきのおほきおほいまうちぎみの西園寺
のいへに御幸ありて、かへらせ給ふ御おくり物に、
代々のみかどの御本たてまつるとて、つつみがみに
かきつけ侍りける 前太政大臣
つたへきくひじりの代々のあとを見てふるきをうつすみ
ちならはなん(一三三〇)

御返し

大上天皇

しらざりしむかしにいまやかへりなんかしこき代々のあ
とならひなば(一三三一)

(中略)

この歌は広く臣民の立場から、「治者」としての後嵯峨
院に向けられた賀の歌なのであり、答歌における上皇の
心中披瀝はかような民意に対する決意表明にほかならな
い。

佐藤恒雄氏はこの他、『続後撰和歌集目録序』や宝治元年「仙
洞十首御歌合」、「なよ竹物語」も政教の色合いが強いことを
述べている。佐藤恒雄氏のこうした指摘は、後嵯峨院歌壇の
中で生まれた『宝治百首』を考える上でも重要なことであ
らう。

『宝治百首』が、政教の色合いの強い後嵯峨院歌壇の所産
と考えたとき、『宝治百首』における君の治世を寿ぐ賀の歌
の存在は、その作者および企画の中枢にあつた為家にとつて
重要な意味合いを持つていたものと考えられる。

以上を確認した時、第二節において見た「春雨」題歌で後
嵯峨院の治世を寿ぐ歌が多く詠まれていることは、『宝治百
首』企画において非常に重要な傾向と見ることは出来るので
はないか。本稿第一節において、『宝治百首』作者間で情報
交換が行われていた可能性を考えた。「春雨」題で後嵯峨院
の治世を寿ぐ歌を多く詠んだことも、作者間で申し合わせた
上でのことであつたとも考えられよう。自然発生的に「春雨」

秋				夏														
秋田	見花	翫花	惜花	松上藤	早苗	夏草	六月祓	見花										
1458	526	527	576	618	939	1007	1166	756										
1446	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1447	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1446	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1445	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1187	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1182	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1166	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
1007	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
939	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
756	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
742	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
723	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
618	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
581	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
576	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
527	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
526	527	527	576	618	939	1007	1166	756										
吹く風のどけき御世につかへてぞ二 心なく花はみるべき(基良)	限なき御代にかはらず九重の花をみる こそ身の思ひいで(隆親)	山桜をりなつかしくふく風も枝をなら さぬ御代としらずや(有教)	我が君の御代の春風しづかにてあくま で花の色になれぬ(顯氏)	いくよろづめぐりあふべき君が代の春 にも花を猶ぞをしまん(定嗣)	さきつづく藤さかへむと春日山松にぞ 君をいはひかけつる(実氏)	君が代の松にかかれる藤なれば千たび さくべき花かとぞ思ふ(寂能)	君が代のちとせの春の藤の花松にとの みぞさきかかりける(俊成卿女)	五月きていそぐ早苗をとりもあへず御 代さかゆべき程を知るかな(成実)	まくずはふ夏野の草はしげれども君が 御代には道ぞおほかる(隆親)	今夜又ちとせをのぶるみそぎしていと ど(久しき御代ぞしらるる(基良)	君が代のとほつ河波たちまちにちとせ のみそぎす神やうけひく(寂能)	みそぎする河せに波のかげまくもかし こき千代は我が君のため(経朝)	風渡る民の草葉もしあれば君にぞな びく千代の秋まで(基良)	民もみなをさまれる世と折るなりかり ほすいねの数もかくさず(隆親)	はるかなる田のものおしねなす雲の立 ちさかへたる御代の秋かな(為家)	見わたせば田のものいねのおしなべて 雲なす御代の程を知るかな(成実)		
4首	2首	2首	1首	3首	1首	1首	3首	1首	1首	1首	1首	1首	1首	1首	1首	1首	1首	1首

雑				冬														
夜灯	積雪	歳暮	曉虫	閨霧	重陽宴	九月尽	積雪	歳暮										
3317	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
3316	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
3313	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
3296	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
3280	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
3259	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
2368	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
2165	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
2164	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1988	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1966	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1866	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1863	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1855	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1788	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1786	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
1522	1866	2164	1522	1786	1855	1966	2164	2368										
こゑにちよ松虫ぞ聞ゆなる君をし いの老のねぎめに(実氏)	閨の戸をさすことしらぬ君が代に霧に やすらふ足柄の山(経朝)	君が代に又相坂の道しあればへだてし 霧をよそにみるかな(成茂)	ぬりえたる菊の白露杯にくみてつきせ を御世はみえけり(有教)	我が君のよを長月によるひをはけふ白 菊の花にまがひぬ(真観)	けふかざす菊の下露としをへてふちと なるべき御代ぞ久しき(経朝)	けふのみと秋の日数を惜めどもかぎら ぬ御代の千千の行末(隆親)	今日くるる習は有りとも君が代に千度 もめぐる秋の長月(成茂)	程もあらはにふれる白雪(家良)	あとたえてふりぬる雪の日数にぞ年ゆ たかなる御代は知らるる(基良)	さりとともと君につかへし跡はあれど又 いたづらに暮るとしかな(信覚)	世を照す御代の光のあまねきにくらさ よるなき窓の灯(寂能)	君が代は千千に枝させ峰たかきはこや の山のまつ行末(実氏)	君が代に峰の小松のかねてより千世あ らはなるふかみどりかな(成実)	君をいはふ人の心を見ぬの松花さくか ずと山ぞこたふる(俊成卿女)	かがみ山君がためとや峰におふる松も ちとせのかげは見えけり(但馬)	我が友と君が千年をみぬの松まつなり けりな色もかはらで(下野)		
5首	1首	1首	1首	2首	3首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首	2首

//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//		
3956	3955	3954	3953	3952	3951	3950	3949	3948	3947	3944	3939	3938	3935	3934	3933	3932		
君まもる宮この南をとこ山万代とこそ こゑよばふなり(下野)	八千とせに猶あまりある君が代をまも る神ちの山ぞのどけき(但馬)	君を祈る事はたがはし神がきやゆふし でかけて今なびくらん(弁内侍)	ちはやぶる賀茂の瑞籬としをへて久し き世にもつかへてしかな(少将内侍)	うごきなくたてし内外の宮柱君にぞ末 をつたへおきけん(後成卿女)	君にちぎりおくらむ(小宰相)	神路山も枝の松もさらに又いく千代 さこそは君の世をまもるらめ(帥)	伊勢の海やあまてる神もうけひくは波 閑なる御代ぞ久しき(按察)	てぞ千代の影もみえける(高倉)	君がよはひを猶かさねつつ(禪信)	いそのかみふるのやしるもふりにけり 君がよはひを猶かさねつつ(行家)	ながれの末もはるかに(行家)	にぎりなき御代はつきせじ石清水流つ るも君が万代のため(為氏)	ちはやぶるみむろの櫛ゆふかけていの となびく伊勢の浜萩(寂能)	君が代はしめもゆるがぬ神風におのれ すそ河のながれ久しき(成実)	神代よりまもりぞきつる我が君のみも とさしても色はかはらじ(定嗣)	おほ君のみかさの山のみさかきは千代 とさしても色はかはらじ(定嗣)	君がへん御代の久しきしるしにはか てぞいふかものみづがき(師継)	いはしみづぶかきちぎりを結びおきて いく万代も君ぞすむべき(有教)

//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	//	寄日記					
3975	3974	3973	3972	3971	3970	3969	3968	3967	3966	3965	3964	3963	3962	3961	3960	3959					
なき世の千代の行末(成実)	朝日山さしても君がためしとてくもり かへんと照すべらなり(定嗣)	あさひこは千代の影もて我が君の国さ かへんと照すべらなり(定嗣)	我が君のやまと鳥根を出づる日はもろ こしまでもあふがざらめや(師継)	朝日の光なりけり(有教)	くもりなき御代のしるしは神ち山照す 朝日の光なりけり(有教)	空はれてやぶしもわかぬ日の本の秋津 島根はのどけかりけり(頼氏)	万代を空にするかな(資季)	くもりなき日影をみても君がへんやは 朝日の出づる山の端(忠定)	君がため雲さへ空にをさまれる御世と 日影の限なきかな(為経)	やすみしるやまと岩根の君が代を照す せの春も君のみぞ見む(信覚)	みかさ山いづる日影ものどかにて千と せの春も君のみぞ見む(信覚)	岩戸出でて日影は今もくもらねばかし こき御代をさぞ照すらん(実雄)	らぬよるつ代の春(公相)	みかさ山峰たちのほる朝日影空にくも 本といではじめけり(為家)	世を照すよの光も君がため我が日の 代の光しるしも(隆親)	神ち山さすや朝日の限なくのどけき御 代に照すよの光も君がため我が日の	くもりなき御代の光はかくしこそ出づ る朝日ものどかなりけれ(基良)	ひさかたのあまつ日影もくもりなき御 代のためとやてりははじめけん(家良)	せは空にみゆるし(基家)	いづる日の君の光のます鏡むかふ千と にくもりあらずな(実氏)	ちはやぶる神路の山の朝日影猶君が代 にくもりあらずな(実氏)

3996	3995	3994	3993	3992	3991	3990	3989	3987	3986	3985	3984	3983	3981	3978	3977
千とせを空にするかな(下野)	山の端を出づる日影のくもりなく君が	しるきかないづる朝日のいく千代もく もらぬ御代の行末の空(但馬)	空はれて出づる朝日の影を見よ君が光 のためしなりけり(弁内侍)	いづる日の光のどけき君が代はさして ちとせの程ぞみえける(少将内侍)	あまてるや空にくもらぬ日の御影すま ん限の我が君のため(俊成卿女)	しりにけん朝日の山の光より万代かけ て照すべしとは(小宰相)	うごきなきはこやの山を照す日の光の どけきみよにも有るかな(帥)	出づるよりのどかなりける春の日の長 きや君が御かけなるらん(按察)	あさ日影君が光にさしそへてくもりな き代をいまぞしりぬる(禪信)	も代をてらしけり(隆祐)	日の本の国のうちなる宮こより君が光 も代をてらしけり(成茂)	ひさかたのあまの岩戸を出づる日の光 はてらせいく万代も(行家)	君が代はあまのかぐ山いづる日の隈も しらぬ空にまかせん(経朝)	久堅のくもらで出づる朝日山うごかぬ 御代のすゑぞはるけき(寂能)	いづる日の光にむかふたびごとくに君が やちよを祈りてぞふる(顯氏)

134
首

- 注
- 1 『歌論歌学集成 第十卷』(三弥井書店/一九九九年五月)
 - 2 『宝治二年院百首とその研究』(安井久善/笠間書院/一九七一年一月)
 - 3 『源承和歌口伝注解』(源承和歌口伝研究会/風間書房/二〇〇四年二月)
 - 4 鳥井千佳子『堀河百首』とその背景―周辺の歌学書との関連における―(『中古文学』第三十六号/一九八六年三月)
 - 5 竹下豊『堀河百首』の成立事情とその一性格―堀河百首研究(一)―(『女子大文学 国文編』第三十六号/一九八五年三月)
 - 6 伊倉史人『永久百首』とその背景(『三田国文』二十七号/一九九八年三月)
 - 7 『平安後期歌人伝の研究 増補版』(井上宗雄/笠間書院/一九八八年一〇月)六二六頁
 - 8 佐藤明浩『為忠両度百首』に関する考察―歌作の場の問題を中心に―(『語文』第五十七輯/一九九一年一〇月)
 - 9 『俊成論のために』(黒田彰子/和泉書院/二〇〇三年)
 - 10 藤平泉『宝治百首』流行の表現(『神戸大国文』第六号/一九九五年三月)
 - 11 日本古典文学大系八七『神皇正統記・増鏡』(岩佐正・時枝誠記・木藤才藏校注/岩波書店/一九六五年)

- 12 日本古典文学大系八七『神皇正統記・増鏡』（岩佐正・時枝誠記・木藤才藏校注／岩波書店／一九六五年）
- 13 中世の文学『六代勝事記・五代帝王物語』（弓削繁校注／三弥井書店／二〇〇〇年六月）
- 14 南北朝時代に成立した歴史書と考えられているが、『神皇正統記』との記事の類似が認められ疑念を持たざるをえない。南北朝時代後の成立か。
- 15 重要古典籍叢刊二『校本保暦間記』（佐伯真一・高木浩明編著／和泉書院／一九九九年一月）
- 16 『藤原為家研究』（佐藤恒雄／笠間書院／二〇〇八年九月）序章 後嵯峨院の時代、第一節 後嵯峨院の時代とその歌壇、四 後嵯峨院歌壇の政教性 ※初出「国語と国文学」五四―五（一九七七年五月）